

第22回昭和館運営有識者会議

日時 令和4年3月17日(木)

15:00～

場所 TKP市ヶ谷カンファレンスセンター

○波多野座長 定刻になりましたので、第 22 回昭和館運営有識者会議を開催いたします。本日は、昨夜に地震がありまして、更に年度末のお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。本日の会議も新型コロナウイルスの感染状況を踏まえまして、Web 会議の併用によって開催いたします。Web 会議になりましたので、何か御不便な場面があるかもしれませんが、御協力のほどお願いいたします。

本日の出席状況ですが、8 名の委員中、1 名に Web で参加していただいております。また、会場には 3 名の委員に出席いただいております。神津カンナさん、増田先生、私です。鈴木委員、藤田委員、松井委員、山田委員については御欠席ということですので。急にいろいろな用事が出たりしまして失礼するということですので。オブザーバーとして、しょうけい館からも出席いただいております。よろしくをお願いいたします。

事務局より、有識者会議委員の紹介を改めてお願いいたします。

○櫻井補佐 厚生労働省社会・援護局援護企画課課長補佐の櫻井と申します。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。大変僭越ではありますが、私からお手元の委員名簿の順番に従いまして、改めて皆様を御紹介させていただきたいと思っております。よろしければ委員の先生方、近況などがありましたら一言添えていただければ幸いです。

では、御紹介させていただきます。この会議の座長を務めていただいております波多野先生です。

○波多野座長 座長を比較的長くやらせていただいているのですけれども、現在、主に国立公文書館の附属施設のアジア歴史資料センターで仕事をしております。週 1、2 回上京しているのですが、大学においても今年度いっぱい研究室を維持していたのですが、今年度で終わりになってしまいました。引き続き、この昭和館の事業には協力してまいりたいと思っております。よろしくをお願いいたします。

○櫻井補佐 続きまして、本日は Web での参加になっております。上安平冽子先生です。

○上安平委員 上安平です。本日はわがままを言って Web で参加させていただきました。御迷惑を掛けて本当に申し訳ありません。御配慮ありがとうございました。

今朝、テレビでニュース番組を見ておりましたら、ウクライナのゼレンスキー大統領がアメリカ議会での演説で、「私たちの受けている攻撃は真珠湾攻撃やアメリカの 9.11 の攻撃と同じようにひどいものです」とおっしゃった件がありまして、そのときは食事をしていたのですが、はっと思いました。ウクライナの大統領が真珠湾のこと、真珠湾というのは正に、ある種、昭和の歴史の 1 つの側面を表していると思うのですが、それを歴史として、非常に大きな歴史的な事実として言及しているということに、私は驚きました。

そして、昭和というあの時代というのが、もう歴史の世界に入り込んでいるのだなという、我々の記憶とか追憶を超えて、共通の歴史の中の一部に組み込まれつつあるということを実感しました。それはまた、昭和館がこれから行く方向性を、ひょっとしたら示してくれているのではないかと、歴史への貢献ということもあるのではないかと思いつつ、本日ここに参加させていただきました。

○櫻井補佐 続きまして、神津カンナ先生です。

○神津委員 神津カンナです。よろしくお願ひいたします。私は東京に住んでいるのですが、昨夜は両親の住んでいるマンションと私の住んでいるマンションと、それから妹一家が住んでいる家と、割と近場にあるのですが、3か所とも3時間ぐらい停電をしていました。

その停電をしているときに連絡をしてみましたら、妹は「カフェバーみたいになっているわよ」とかと言っていました。つまり、のんびりテレビか何かを見ていたのですが、ランプをつけてムードのある雰囲気でも過ごしているようでした。

次に両親の所に、ここに来る前に寄ってまいりましたら、いっぱい小皿があって、そこに蝋燭がありまして、「戦時中はこうやって空襲警報のときにしのいだものだ」と父が言っておりまして、今は蝋燭のある家というのもなくなっているかもしれません。蝋燭の扱い方でも蝋をちゃんと垂らして小皿の上に置いて、それを幾つか置いているような形でやっておりましたけれども、蝋燭の扱い方もだんだんわからなくなってしまったかもしれないというように思いました。

私は「お風呂のお湯を捨てなければよかったな」とか思うぐらいでしたけれども、「カフェバーみたいになっているわよ」という妹と、「空襲警報のときにはこうやってしのいだものだ」と言う90歳の父と、そういうものを見て、同じ停電でも随分対処の仕方が違うものだということに思っております。

○櫻井補佐 続きまして、増田弘先生です。

○増田委員 増田です。私は現在、立正大学で近代・現代の日本の政治・外交史を講義しておりまして、その専門領域の中で、委員をやらせていただくということになるわけですが、同時に昭和館さん、しょうけい館さんとは、いつも毎年御一緒にさせていただいております新宿の平和祈念展示資料館に長らく関わっております。そちらの面からも、昭和館の運営状況などについても、いろいろ興味がありまして、またいろいろ御意見等を言わせていただければと思っている次第です。どうぞよろしくお願ひいたします。

○櫻井補佐 引き続きまして、前回開催以降、厚生労働省社会・援護局の人事異動がありましたので、ここで御紹介させていただきます。まず、山本麻里社会・援護局長です。

○山本局長 山本です。どうぞよろしくお願ひいたします。

○櫻井補佐 続きまして、本多則恵大臣官房審議官です。

○本多審議官 本多です。どうぞよろしくお願ひいたします。

○櫻井補佐 続きまして、衣笠秀一社会・援護局援護企画課長です。

○衣笠課長 衣笠です。よろしくお願ひします。

○櫻井補佐 なお、本日、山本局長はほかの用務のため途中退席とさせていただきます。御了知いただきますようお願い申し上げます。以上です。

○波多野座長 山本局長、御挨拶をお願ひいたします。

○山本局長 厚生労働省社会・援護局長の山本です。昭和館運営有識者会議の開催に当た

りまして、御挨拶を申し上げます。

委員の先生方には、日頃から昭和館の運営に当たり御尽力を頂いておりまして、厚く御礼を申し上げます。また、本日は大変御多忙の中をこの会議に御出席いただきまして誠にありがとうございます。

昨年度から続く新型コロナウイルス感染症の拡大により、昭和館では令和3年度も一時的な休館を余儀なくされ、また、営業再開後も完全に来館者が戻ったとはいえ、大きな影響を受けた1年でありました。

しかし、戦中・戦後を知る世代が年々減少していく中で、先の大戦の記憶を風化させることなく次の世代に継承することの重要性はますます高まってきており、戦没者遺族をはじめとする国民が経験した戦中・戦後の生活上の労苦を次世代に伝えていくことを目的とする昭和館の意義も、一層重要だと考えております。

厚生労働省におきましては、次世代への継承事業の更なる強化を図るため、平成28年度より戦後世代の語り部育成事業を実施しておりますが、令和3年度に全ての研修生の育成が終了し、「次世代の語り部」として講話活動を実施してまいります。新型コロナの影響により満足いく活動ができていない部分もありますが、この活動は今後とも継続してまいりたいと考えております。

本日は、昭和館の令和3年度の事業報告、令和4年度の事業計画案について御意見を頂くことになっております。昭和館の運営が長引くコロナの状況を乗り越え、より充実したものとなるよう、皆様方の幅広い見地から忌憚のない御意見を賜ればと考えております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○波多野座長 続きまして、羽毛田館長にお願いいたします。

○羽毛田館長 皆様方におかれましては、日頃から昭和館の運営につきまして御指導を賜っておりますこと、厚く御礼を申し上げたいと存じます。

局長からもありましたけれども、新型コロナウイルスの襲来は昭和館に甚大な影響を及ぼしました。昨年度に続きまして、令和3年度も4月25日から5月31日まで閉館を余儀なくされました。6月1日からは、コロナの感染防止に重大な関心を払いながら、万全の措置を講じながら開館してまいりましたけれども、それでもいろいろなイベント、あるいは研修といったものについて、中止あるいは延期をせざるを得なかったものも出てまいりました。入館者につきましても、この2月までの実績で申しますと、6万9,000人ということで、これは昨年度に比べれば15%ほど伸びた数字ではありますがけれども、コロナ以前の数字からすれば到底及ばない低い水準になっております。

こうした厳しい状況にはありますけれども、昭和館としては、これも局長からもありましたように、その使命の重要さということ胸に念じまして、いろいろ展示内容の充実はもとよりのことですが、デジタルアーカイブの整理だとか、ホームページ、YouTubeチャンネルの活用といった、こういう入館者に制約があるときであれば、どういった方法で情報発信していけばいいだろうかというようなことについても、一生懸命努力を

いたしまして、何とかこの使命を達成するために、少しでも努力をしたいという姿勢でや  
ってまいったわけです。

3月12日から、「SF・冒険・レトロフューチャー×リメイク～挿絵画家 椛島勝一と  
小松崎茂の世界～」と銘打った特別企画展を開催しておりますし、3月19日、この週末  
からは、写真展の「うつりゆく昭和の九段下界限」ということで、これも開催を予定して  
おります。

季節も春酣になってまいりますし、何とかコロナ禍ではありますけれども、少しでも多  
くの方々にこれらを御覧いただき、そこを通じてまた戦時下における、戦中戦後におけ  
る国民生活の労苦というものに思いを致していただけるような、そういったことになっ  
ていければよろしいなというように思っております。そういうわけで、今後とも当館の使命  
の達成のために努力を続けたいと考えておりますので、皆様方の忌憚のない御意見を賜れ  
れば幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○波多野座長 ありがとうございます。

○櫻井補佐 申し訳ありませんけれども、これより山本局長は退席させていただきます。

○波多野座長 議事に入る前に、資料の確認を事務局からお願いいたします。

○櫻井補佐 お手元の資料につきまして御案内させていただきます。今回、配布資料とし  
て、資料1「令和3年度昭和館運営事業の実施状況について」、資料2「令和4年度昭和  
館運営事業計画案について」、資料3「第20回昭和館見学作文コンクール昭和館特別賞  
作品」、資料4「第14回昭和館中学生・高校生ポスターコンクール作品各賞」、資料5  
「特別企画展 展示構成」、資料6「写真展 展示構成」、資料7「令和4年度昭和館運営  
事業計画」となっております。また、参考資料として、そちらの資料の一番最後に「昭和  
館運営有識者会議開催要綱」、最初から2番目の資料として「昭和館運営有識者会議構  
成員簿」、別の資料として「本日の座席図」を配布しております。全てお手元にありますで  
しょうか。

○波多野座長 それでは、ただいまから議事に入りたいと思います。議事次第にあります  
ように、1つは「令和3年度運営事業の実施状況について」です。もう1つは、「令和4  
年度の事業計画案について」です。この2つについて議論いただきたいと思います。はじ  
めに、今年度の事業の実施状況について説明をお願いいたします。

○井上総務部長 昭和館井上より説明させていただきます。資料については、事前に送付  
させていただいておりますので、本日の質疑時間を考慮し、私からは特に強調したい箇所  
を中心に説明をさせていただきます。必要に応じて補足説明をさせていただきたいと思いま  
す。

資料1により、令和3年度の実施状況について説明します。1ページの昭和館入場者状  
況についてですが、先ほど来話が出ておりますが、新型コロナウイルス感染症の緊急事態  
宣言の発出に伴い、昭和館は4月25日から臨時休館としました。6月1日から博物館に対  
するそれまでの休業要請が切り替わりましたので、昭和館としては、検温等の感染防止対

策を徹底することにより事業を再開しております。

最初に、(1)6月から1月末の総入場者数ですが、合計6万6,099人です。なお、平成11年度以降の入場者数は、合計で642万6,559人となっております。(2)各展示室等の入場者状況の内訳は記載のとおりですが、資料に添い順次説明をさせていただきます。

2ページをお開きください。2ページについては昭和館利用状況として、平成4年1月31日現在の統計資料を付けております。以下、6ページまで入館者の状況をまとめております。資料2ページの昭和館利用状況については、昨年同時期との相違点を3点説明させていただきます。

1点目は、臨時休館の期間が今年は約1か月間、5月だけがゼロになっておりますが、昨年は4、5月の2か月間、入場者がおりませんでした。その関係で前年度同期比では、人数が先ほど館長からも御説明しましたが15%増となっております。

2点目ですが、団体入場者の休止期間が今年は約1か月、5月です。昨年は、4～9月までの6か月間、小学校の団体見学等が実施できませんでしたので、その関係もあり、今年のほうが団体の入場者数が増加となっております。

3点目ですが、コロナ禍での来館につながる事業については、昭和館として検討を重ねました結果、感染防止策を徹底しできる限り来館者をお迎えする取り組みを行いました。それらのことよって人員が増加していると推測をしているところです。

4ページの入場者の状況は、平成11年度から現在までの数字をまとめておりますが、コロナ禍の令和2年度は年度の合計で約7万人の入場者となっております。コロナ前の例えば令和30年度は41万人の入場者がありましたので、昨年と今年度は若干の相違はありますが、コロナ前に比べますと遠く及ばない数字ということです。

7ページでは広報活動の実施状況について、それぞれPR活動等を記載しております。資料については個々の説明は省略させていただきますが、広報活動の細部については8～9ページに具体的に掲載しております。

10ページではホームページ、SNSの状況について記載しております。特に(6)SNSの状況ですが、昨年度との比較で見ますとYouTubeの視聴回数が昨年は約3万件弱、今年については187万4,562件で、極端に多くなっている状況があります。その下に3つのYouTube画面をコピーで付けておりますが、昨年同期に比べて大幅に増加したものをベスト3ということで付けております。2)大竹の日本人引揚者記録映像については、インターネットの電子掲示版サイトにおいて投稿がありました。日本に来たときの貴重な映像があるぞということでコメントが付いており、そこにこの映像の貼付けが出ており、これ以降、アクセス件数が大幅に伸びたという実績で、61万回の視聴ということで増えているところです。

11ページについては、来館促進対策について、常設展示室の入場無料等を記載しております。12ページをお開きいただきたいと思っております。12ページの(6)ですが、紙芝居定期上演会については、今年はコロナウイルス関係がありましたので年度で3回実施予定です。次は3月26日を予定しておりますが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けている状

況があります。12 ページの 4 の展示事業、常設展示室の資料交換は、6 月と 1 月に実施いたしました。

13 ページの特別企画展については 3 月と 7 月。3 月は「丈夫なからだで病を防げ！～健康づくりと感染症予防～」。7 月は「ポスターのちから～変化する役割と広がるデザイン～」として実施しております。

13 ページ、③「SF・冒険・レトロフューチャー×リメイク」については、資料 5 により、この後学芸担当より詳細に説明をいたします。

14 ページは巡回特別企画展の開催状況を記載しております。10 月に「くらしにみる昭和の時代 兵庫展」ということで開催し、入場者数は 3,342 人です。そして、10 月末から 11 月にかけて、昭和館、しょうけい館、平和祈念展示資料館 3 館連携企画展として、島根県で企画展を実施しております。こちら入場者数は 1,842 人でした。

15 ページの(4)写真展の開催ですが、「漫画『風太郎不戦日記』を通して知る戦時下のくらし」については、令和 3 年 3～5 月に開催し入場者数は 4,945 人でした。

16 ページをお開きください。16 ページの②「1946 明日へ」ということで 9～12 月に実施し、入場者数は 1 万 629 人でした。③「うつりゆく昭和の九段下界限」については、この後、図書情報担当より詳しく説明いたします。

5 資料収集については、16～17 ページに実物資料等の収集等を記載しております。

17 ページの 6 戦中・戦後の労苦を伝える語り部育成・活動事業について、(1)語り部育成事業については 18 ページにかけて記載しておりますが、第 1 期生から第 3 期生まで育成研修を終了したところです。

18 ページを御覧いただきたいと思います。18 ページの語り部活動事業として定期講話会については 5 回、講話派遣については 4 回を実施しております。なお、定期講話会は偶数月ということで、4 月 3 日に昭和館で開催を予定しているところです。

19 ページの 7 情報検索システムの充実については、記載しているとおりで。

20 ページをお開きいただきたいと思います。資料公開等については、20～21 ページに記載しております。21 ページの関係施設との連携については、21～22 ページに記載しております。

22 ページの 10 ですが、昭和館運営専門委員会の開催については、7 月は委員会の形で開催をし、この 2 月については書面にて実施したところです。

22～30 ページにかけてアンケート結果について整理しておりますが、時間の都合もありますので割合させていただきます。

続いて、学芸担当より説明をいたします。

○林学芸課長 では、資料 5 の、「特別企画展」の内容につきまして、簡潔にポイント、ポイントを押さえながら御説明をしていきたいと思っております。資料 5 の横型になっています資料のほうです。まず、表紙に展示資料点数を記載していますが、全てで 143 点の資料を展示しております。そのうち実物資料は今回、挿絵の原画が中心になりますが約 100 点、

うち借用の資料が 95 点で、今回の企画展に限りましては収蔵資料を中心とした企画展というよりは、テーマに沿った昭和史に関する展示ということで、各関係部署からお借りする形で構成をした企画展になります。あとは資料としまして書籍の展示もしていますが、基本的に書籍は昭和館の所蔵のものを中心にはしているのですが、今回、講談社さんから書籍もお借りしていますので、借用の数がそのうち 37 点ありますということを記載しています。

次に、2 ページの所に会場の平面図がありますが、真ん中の赤い壁のほうで基本的に空間を区切っています。1 ページの右側に章立てがありまして、3 章立ての構成になっています。一番左の扉からお客様が入場しています。まずは「1 章 梶島勝一と『少年倶楽部』」というコーナーがあります。こちらが会場のほぼ半分を占めています。

続きまして、2 章と 3 章が挿絵画家の小松崎茂さんの画業を御説明したコーナーになります。そちらが右側のエリアになっています。資料の展示空間に関しましては、分かりやすいように二分割している状況ですが、小松崎茂さんの今回、講談社さんからお借りをした、『少年少女世界科学冒険全集』という本があるのですが、そちらの原画の数が非常に多くてこれが 33 点、一番右側の平置きの展示になっています。このような感じで展示をしていますので、小松崎さんの資料のほうやはり数としては圧倒的に多いと、そういう内容になっています。

3 ページの所ですが、その章の話に入る前のプロローグのコーナーになりますが、こちらは少年文化における SF という、そういった概念を取り入れた作家さんをまず御紹介するというので、『空想科学(SF)の黎明』と名付けたコーナーになるのですが、こちらで紹介しているのは、愛媛出身の小説家でもあり編集者である押川春浪という人物になります。この押川春浪がいろいろな作家さんの育成、内容としては『海底軍艦』、これは後に昭和の戦後になって、この海底軍艦をモチーフとした特撮映画が撮影されたりとかするのですけれども、そのくらい非常に SF 文化に多大な影響を与えた方、この方が明治期から活躍をしていたので、この方がいわゆる大きなきっかけの人物であるということを入口のほうで御説明をしまして、1 章のほうに入っています。

1 章が 4 ページからになります。こちらが「梶島勝一と『少年倶楽部』」というコーナーです。少年倶楽部という雑誌は講談社さんで出版されていたもので、講談社さんが大正 3 年から雑誌を戦後も続けて出版していたものなのですが、大正期の少年倶楽部というのは、どちらかという日本画の影響を受けた挿絵で、代表的な挿絵画家は高島華宵という人物だったのですが、満州事変の前後ぐらになってくると、どちらかという軍をモチーフにしたような少年小説が流行っていくようになります。そうした中でこの梶島勝一さんは、絵のほうでページにサムネイルがあるのですが、非常に写実的にかつ雄大な絵を描かれる方なので、この方の絵のテイストとその時代背景、特に軍事科学冒険といったカテゴリーの小説が少年誌で非常に人気が出るのですが、そういうものとこの梶島さんの写実的な絵が非常に融合して、一躍人気の挿絵画家になられるという方です。この方の人物紹



介は4ページの右上に紹介を入っていますが、この方は、長崎県生まれの方になります。昭和40年に亡くられるのですが、この方は一貫して挿絵画家としての仕事を貫き続けた画家になります。その後紹介する小松崎茂さんは、どちらかという時代の変容に合わせた作家さんになるのですが、椛島勝一さんはもう一貫して自分はペン画、これが自分の画業としては自分のメインであるということで作品を描かれた方になります。この方が描かれた作品で意外だと思うのが、「正チャンの冒険」の正ちゃんを生み出した方です。この「正チャンの冒険」を大正11年に、これは原作者は別の方なのですが、その正ちゃんの絵とリスの絵といった漫画の絵を描かれていた方で、その絵を見て少年倶楽部の編集長の加藤謙一さんがスカウトをする形で、少年倶楽部の作品の挿絵を描いていかれる方になります。作品は今回、小説の中でも5作品を選んでいきます。ちなみにこれは講談社さんの所蔵している原画になりますが、出身地である長崎県の長崎県美術館に寄託をされていますので、今回、長崎県美術館から借用した絵画になります。

1つ目が山中峯太郎さん原作の「敵中横断三百里」、これで椛島さんは一躍人気作家になりました。昭和5年に最初に連載されたものになりますが、これは日露戦争をモチーフにした軍事冒険小説で登場人物は実在した方です。メインになる方は建川中尉になります。この方はその後どんどん偉くなって非常に有名な陸軍の中将さんになっていく方ですが、そうした実際の人物が出てきます。絵のほうでも例えば5ページの上の段、左から2番目の絵が大山巖に報告をしているシーンになります。これも大山巖に非常に似たりリアルな絵です。写真のような絵ということで、子供たちが非常に魅了された最初の作品になります。

その後が同じ山中さんの「亜細亜の曙」です。こちらもどちらかという、軍をテーマにしたものになっていくのですが、欧米諸国が日本、アジアといった所にいろいろと攻めてくることを阻止しようという、そうしたテーマの話が非常に多くなっていきます。この「亜細亜の曙」もそういうテイストになります。あとは6ページの海野十三さんが原作の小説「浮かぶ飛行島」いう作品です。これも飛行島をイギリス軍が作って、それで日本を攻めてくる、そういったことを阻止しようという話になるのですが、当時の社会状況というものが、かなり色濃く少年誌に現れていたのだなというのが分かるような作品です。一方、この椛島さんが海の描写をこの作品でたくさん描くのですが、これが非常に評判がよくて、それで椛島さんの海の絵、船の絵というのが人気が出て、それで「船の椛島」という異名が付くというそのくらい非常に写実的で美しい絵になっています。

続きまして、7ページの「太平洋魔城」、これも同じ海野十三さんの作品になりますが、先ほどはイギリス軍が攻めてくる話でしたけれども、今度はソ連軍が攻めてくるそういう設定の架空の軍事冒険小説になります。こちらは魔城にいる宇宙人のような、ちょっと異質な人物を描かれたりといったかなりSF感のある挿絵が非常に多い作品になります。

こういった中で、社会的な、戦争の特に満州事変以降はそうしたものが子供たちの文化にも影響をしていくのですけれども、如実にそれがはっきり現れていくのはやはり太平洋

戦争以降になってきます、そこを8ページの下の段のほうで説明しております。戦争の影響を受けたということで、椛島さんが描く作品というのも、原作者が現役の軍人さんになり、そして検閲を受ける。この場合は海軍の軍人さんが原作の「敵艦隊撃滅」という作品を描くのですが、そのときの作品には、海軍省による検閲印、そしてまた海軍省からの指導を受けて、修正跡とかが残ったような原画が多く見られますので、こういう検閲跡が分かるような形で展示をしております。

10ページは、終戦を迎えて、少年倶楽部は戦後まで続きますが、少年倶楽部の終戦間近の昭和20年3・4月合併号、これは椛島勝一さんが唯一、少年倶楽部で表紙を描いた作品です。これがいわゆるザラザラの紙に印刷された一色刷という非常に状態の悪いものになるのですが、これの原画を今回御紹介しています。ですから実際昭和館にある実物の冊子と、この原画「撃墜」という作品、これはアメリカの飛行機を日本の飛行機が撃墜している絵になりますが、この1点のみ表紙を描かれたので、こちらを今回御紹介をしています。あとは少年倶楽部、少年誌ですけれども、子供たちからすると高価なものになるので、少年誌は簡単にポンポン買えるものではないので、回し読みをするのですが、子供たちは男の子だけではなく、女の子もすごく少年誌を非常に好んで読んでいたということで、そういうことを御紹介しているパネルを今回掲示しています。

戦後の作品として1部紹介しているのが10ページの下にあります、「椛島勝一 傑作ペン画集」という連載を少年倶楽部のほうで戦後もされるのですが、そのときの作品を1点お借りして紹介をしています。「ペン画の神様」という異名を持っている椛島さんの絵ですが、空気とか雲とか、これを線で全部画くのですよね、ペン画で。それを実際に印刷してあるものと、描いたものを比較して見ていただくという、ここが結構面白いコーナーになっておりまして、線一本一本で濃淡を付けていく作品になりますので、ここは結構今回、お客さまからも好評なコーナーになっています。非常に画力が高いというのが分かるコーナーです。

あとは次のページの、「正ちゃんの冒険」です。これは戦後になってリメイクをされます。そのときに描かれたもの、原画を今回一部お借りしています。この「正ちゃんのぼうけん」ですが、大正期から連載が始まって、それで子供たちが、正ちゃん帽という帽子をかぶるのが流行ったりとか、そうした社会的なムーブメントも作った作品になります。1、2年前の「おちょやん」という朝ドラでも、この「正ちゃんのぼうけん」というのが取り上げられたことで、そういう意味では皆さまの記憶に結構残っているような作品だと思いますので、今回、この「正ちゃんのぼうけん」というのを、椛島さんの画業の一つとして御紹介しているコーナーがあります。

こういう形でまず半分のエリアを椛島さんで、次が、小松崎茂さんになります。この方は椛島勝一さんの絵に非常に影響を受けて、それで挿絵画家になられた方です。東京の南千住でお生まれになって、最初は日本画家の方に師事をしていたのですが、挿絵画家に転向する。この理由として、1つは、挿絵のほうはお金になるということから、非常に貧し

い育ちの方だったそうなので、お金になるということと、一番大きいのは椛島さんの絵に非常に憧れていたということです。これはお弟子さんからの聞き取りとかでもいろいろとそういうことを先生がおっしゃっていたことを聞いていまして、それで憧れの連鎖ということで、椛島さんに憧れて挿絵画家になっていき、そしてその小松崎さんの挿絵に憧れる子供たち、そうしたことを意識した感じで今回は解説を書いたりしています。

この小松崎さんといいますと、戦中は『機械化』という雑誌、今回はこの昭和館で所蔵しているものを御紹介していますが、戦中はどちらかというと、空想科学だけでもやはり軍事的なものを、自分でいろいろとアイデアを考えながら描かれていたということで、今回紹介しております。あとは戦後になりますと、絵物語ブームです。絵物語という小説にちょっと大き目の挿絵が入るようなものになります。漫画の一個手前のような作品になるのですが、そういったブームを山川惣治さんと一緒に作られた方になります。その後は昭和30年代になると、宇宙もののSFもので、でもイメージしやすいのはどちらかというと、このプラモデルの箱、ボックスアートの先駆者として非常に有名な方なので、今回は株式会社タミヤさん、静岡の模型会社です。こちらから今回その原画をお借りしています。

次の13、14ページは絵物語の作品を御紹介しています。15ページが戦記物ブームで、小松崎さんが、占領期を終えると少年雑誌が、いわゆるGHQからの検閲の反動もあって、軍事的なものを、昔の軍艦とかそういうものの挿絵、口絵というものが多く掲載されるような傾向が出てきます。これは実際近現代史でも研究されている分野でもあるのですが、そうした戦記物ブーム、反動が起きたということで、そのときにこの小松崎さんの口絵が非常に人気が出ました。ですから、そういうものを御紹介しています。例えば15ページの、上の段の真ん中にあります「戦艦大和」などは、当時、戦艦大和というのはそこまでいろいろな情報が出ている状況ではありません。存在自体も戦後になって初めて気付いた艦になりますので、実際の大和のフォルムとかサイズとはちょっと違うような描き方ですが、ある意味、小松崎さんの想像を詰め込んだような戦艦大和になりますので、そういう意味でも面白いかなと思います。

下の段が先ほど言いました田宮模型からお借りしている模型の箱絵、ボックスアートになります。今回このボックスアートの原画は、これはなかなか借りられないものなのですが、田宮俊作さんという、実際に小松崎茂さんに交渉した方、この方はまだ御健在なので、その方とのやり取り、御相談をして今回借りることができました。小松崎さんに最初に田宮俊作さんがお願いしたものが15ページの下段に2点あります「航空母艦 大鳳」という艦と、「ドイツ中戦車 パンサー」。あとは少しページが飛びますが、22ページの一番上の一番右の「スカイワゴン」というこの絵を3点、これを昭和36年に描いていただくように頼んだということです。それで田宮模型のプラモデルの箱といえば小松崎さん、そういうイメージが付くということで、すごく売れたということで、会社が非常に上向きになったと、そうしたきっかけを作っていただいたというようにお話を伺いました。

続きまして、17ページからの、ここは3章ですが、講談社さんからお借りしています

原画が中心です。これは講談社の『少年少女世界科学冒険全集』という図書館とかで扱っている SF の本なのですが、本がまだまだ高価なときに、図書館にこうした SF の子供たちが無料で読めるようなものが入るということで、それで子供たちがかなり一生懸命読んだそうです。年齢的には 70 代ぐらいの方とかが、読んだことあるような本です。今回、表紙の原画と実際の本を照らし合わせて見られるコーナーを作っています。

こちらは説明を割愛しまして、最後は 22 ページが「近未来への期待感」ということで、小松崎さんが描いたものというのは、今、私たちが生活している現代においてはいろいろなものが実際に実現しています。ですから、あえてここでは近未来として、小松崎さんがデザインした乗りものなどを紹介しています。最後に、23 ページにエピローグとして、こちらでは少し文章が長いのですが、小松崎茂さんというのは、どうしても描くものが戦記物のものが多く、非常に人気があったということがあって、好戦的なのではないだろうかとか、軍国主義者ではないかとか、誤解を受けられる方が多かったそうです。でも実際にこの方は空襲で自分の家を失っていますし、戦争でいろいろなものを失った方ですが、だからこそ絵を描いている、ということで、小松崎さんのある文章を今回抜き出して紹介しています。「子供たちに、何か与えなくては、私はそう思わずにいられなかった。夢と希望とをである。夢でいいのだ。一瞬、彼らが夢想する輝かしい未来、それは栄光と富とプライドに満ちたものでなければ。その一瞬の夢が、彼らを奮い立たせるはずであった。累々たる瓦礫の廢墟の中で、私はその思いに胸を熱くした。」というコメントを書いています。小松崎さんというのは、自分が描いたもので子供たちに元気・未来、そして希望を抱いてほしいという、そういうことをずっと思って絵を描かれていた方なのですね。ですから今回、憧れの連鎖ということで、小松崎さんは椛島勝一さんの絵に憧れながら、そして最終的にはこうした挿絵画家の大家になられるのですけれども、描かれたものに込められていた思いというのが割と理解されていない作家さん、美術的なものとしてはまだこれから評価をされる方だと思うので、そういうところで小松崎さんがどういう思いでこうした絵を描かれたのか、昭和史、もちろん少年文化もですが、この戦争体験がこういったある意味サブカルチャーに与えた影響も少しかいま見れるような企画展になっております。

今回は結構男性の年配の方がお客さまとしては非常に多い状況ではありますが、無料の原画展ということで、今日もたくさんお客さまが来られていまして、今のところは盛況でやっております。私からは以上になります。

○坂尻図書館情報部長 それでは資料 6 の昭和館写真展「うつりゆく昭和の九段下界限」という資料について御説明させていただきます。図書情報部の坂尻です。よろしくお願ひします。

A4 サイズで写真が少し小さいのですけれども、大きくすると細かい所まで結構はっきりとしてきて割と興味深い写真が多いので、是非、会期中に足を運んでいただければと思います。今回この「うつりゆく昭和の九段下界限」というのを開催するきっかけになりま

したのは、実は昭和館の隣にある九段会館です。こちらが歴史のある貴重な建造物でもありまして、平成 30 年から建て替え工事が始まって、一部を保存しながらこの夏 7 月頃かと思えますけれどもリニューアルオープンをいたします。

この九段会館は昭和 7 年 2 月に「軍人会館」として建設が始まりまして、昭和 9 年 3 月に完成しております。昭和 11 年の二・二六事件では戒厳司令部が置かれたことが有名で、戦後も GHQ に接收されて「アーミーホール」という名称で連合軍の宿舎として利用されたりなど歴史とともに移り変わってきました。

九段会館だけではなく、昭和館周辺の九段下界限というものも、関東大震災後の復興事業で様変わりしたり、また戦時中は空襲も受けておりまして一帯が焼け野原となりました。敗戦と同時に GHQ の占領下となって多くの建物が接收されて、そのような中で人々は復興に向けて歩き出した。時代とともに移り変わっていくこの九段下界限の戦前・戦中・戦後の姿を所蔵写真の中から御紹介したいと思い、今回この写真展を企画いたしました。

幾つかの写真につきましては、「撮影地の今」と題しまして現在の写真を展示して一緒に紹介いたします。見る方が変化をよりリアルに感じていただけるものになるのではないかと思います。また会期中ですが、5 階の映像音響室では、九段で生まれ育った方のオーラルヒストリーや関連ニュース映像についても御紹介していく予定です。

それでは個々の写真について少し御説明します。全ての写真について御紹介する時間がないので、ピックアップして御紹介していきます。展示写真が約 40 点になります。カラーが 4 点でモノクロが 36 点です。いつもの写真展と同じく、千代田区と千代田区教育委員会の後援を受けて開催します。

まず 1 番目と 2 番目の写真を御覧ください。こちらが「九段坂の大改修工事の様子」と題しておりますが、大正 12 年に発生した関東大震災の復興事業で今の靖国通りですけれども、その九段坂を掘り下げ、緩やかにするという大改修工事が行われました。改修工事前の市電が、左側の牛ヶ淵・千鳥ヶ淵沿いを走行していたという、珍しい写真です。その左に絵葉書がありますけれども、工事前がどのような状態だったかというのを知っていただくために、併せて展示します。

この工事が完成した後の写真が 2 番目になります。「工事後の九段坂下の様子」ということで、なだらかになった坂の様子が伺えると思います。

続きまして 7 番目の写真になります。こちらは「完成した軍人会館」とありますけれども、昭和 9 年に新築されたときの写真になります。「落成式式場」という文字が見て取れるのですが、その前後に撮られたものと思われまます。「帝冠様式」という外観で、現在も進められているリニューアルプロジェクトではこちらの一部が残された形でリニューアルされています。

次のページに移ります。8 番目「戒厳司令部となった軍人会館」の写真になります。ちょうど九段下の交差点の辺りに土嚢が積まれていまして、戒厳部隊が警戒に当たっている写真になります。

次の「愛国婦人会の行進」の写真ですけれども、こちらが九段下の交差点を行進して通過していく愛国婦人会になります。香淳皇后の誕生日を祝って、靖国神社から皇居前広場に向かって行進が行われています。後のほうに写っているのが野々宮ビルと言われているものなのですけれども、ちょうど今、北の丸スクエアがある辺りです。

こちらの愛国婦人会というのは、本部が軍人会館に隣接した所でありまして、今九段下病院の裏側に愛国婦人会発祥の地という碑が残されています。プロジェクトが開始される前は九段会館の前に建てられていたのですけれども、今は病院の裏のほうに移動しています。この団体は、女性や母子のための支援ということで、幅広い社会活動を行っていた団体になります。

続いて 12 番の「春たけなわの内堀通り」、こちらの奥に見えているのが靖国神社の石鳥居になります。ちょうど両脇に桜が咲いている写真になりますけれども、こちらが師岡宏次さんというプロのカメラマンの方が撮影したもので、写真集には掲載されたことがあるのですけれども、今回、写真展では初めて御紹介する写真になります。

続いて 14 番の「牛ヶ淵から見た軍人会館」ということで、ちょうどお堀の所に雪が積もっている写真になります。今回、現在の写真も一緒に併せて紹介するというので、ちょうど 2 月に雪が降りましたが、そのときにタイミングよく同じようなアングルで撮れた写真がありますので、現在も変わらない風景を感じていただけるのではないのでしょうか。

それから 15 番目の「靖国神社に参拝する遺児たち」という写真ですけれども、これは昭和 16 年 3 月 29 日に撮影された写真になります。昭和 14 年頃に戦没者遺児のために靖国神社参拝の行事が実施されるようになりまして、全国各地から遺児たちが靖国神社を訪れました。ニュース映像もありまして、5 階の映像音響室で併せて紹介するのですけれども、全国から 1,184 名の児童たちが集まったということです。

続いて 17 番の写真になります。ここからが空襲の写真になります。「東方社の屋上から見た空襲の黒煙」とタイトルを付けていますが、京橋・銀座方面に黒煙が上がっている様子になります。東方社が入っていた野々宮アパートの屋上から撮影されたものです。この東方社というのが、有名な木村伊兵衛が写真部の部長を勤めていたものなのですけれども、陸軍参謀本部のバックアップで設立されて、写真宣伝物の制作などを目的として活動していた団体になります。

続きまして 18、19、20 番までが、3 月 10 日の東京大空襲後の九段下界限の写真になります。18、19 については、少し人々が行きかうような様子も見て取れます。20 番目は九段坂上の写真になるのですけれども、一帯が焼野原になっています。右側に見えるのが東京家政学院になります。手前に写っているのが焼け残っている金庫です。よく焼け跡には出てくるのですけれども、焼け残った金庫などが写っています。焼け残っている建物は東京家政学院なのでも、昭和 12 年の卒業アルバムの中に同じ建物が写っていて、そこから場所を特定しました。

続いて 21 番目から 23 番目までですけれども、こちらが 5 月の山の手空襲後の九段下界限の焼け跡の写真になります。21 番が「焼け跡での告别式」ということで、家族が遺体の処理をして告别式を行っています。写真が小さくて見えづらいのですが、焼香台がミシン台で代用されています。中心に見えている煙突ですが、火葬場のものと誤解されては…ということ、説明でふれていますけれども、この煙突は九段北一丁目にあった梅ノ湯というお風呂屋さんの煙突です。

22 番目が神田須田町なのですけれども、瓦礫を片づける人々が写っている写真です。のぼりに「神田区須田町一丁目南部町会」と書かれていて、上部には「闘魂」という文字が書かれています。

23 番目は「バラックで生活する家族」です。この写真については、運営専門委員会で、写っている御本人のプライバシーの侵害についてはどうなのかという御指摘がありました。肖像権につきましては、この写真が撮影されてから 75 年以上経っているというところで、個人を特定するのは難しいという考え方の下で展示しています。ただ見に来られた方が、あの方ではないかというような話も出てくるかもしれませんが、そのときは対応しつつ、こちらとしては場所の特定ができたり、当時の様子が逆に聞けるということ、かえって良いことではないかと思っています。

それから、24 番目が終戦のときの写真になります。「靖国神社に参る人々」の写真になります。それから 25 番が「神田の焼け跡」になります。ちょうど内神田の辺りなのですけれども、左側が島津製作所、右側が YMCA です。この敷地は戦後に接收されまして、かなり広い範囲が接收されたいのですけれども、戦後ここに住まわれた方は疎開先から戻ってくるができなくなった状況なのです。

近所の人達が、大きな写真にすると集まって来ている様子が写っているのですけれども、この辺りは印刷工場などがあった地域で、金属が散乱していたらしいのです。当時金属が結構高い値段で売れるということで、それを拾いに集まって来っていたというような話を、ここで生まれて育った佐藤徳治さんという方が、オーラルヒストリーの中で語っていました。

26 番目が「上空から見た軍人会館とその周辺」とあるのですけれども、中心の上の建物が九段会館です。左側の少し大きい建物が「大橋図書館」と呼ばれていた、今で言う公共図書館の役割を担っていた図書館なのですけれども、大手出版社であった博文館の創業者の方が設立に携わった図書館です。右側がりそな銀行の前身となる「日本貯蓄銀行」の建物です。展示する際には、どの建物が何かというのが分かるようにパネルを添えて展示します。

27 番目ですけれども、これも少し珍しい写真だと思うのですが、お堀端が畑になっている写真です。昭和 21 年の写真です。典拠が分からないので今回キャプションに書くことは避けたのですけれども、戦時中に近衛師団が戦中の食糧難に対応するために、畑を起こして、サツマイモとかカボチャとかを栽培していたということです。

次のページにいきます。29 番「神田復興祭のパレード」になります。こちらと 33 番の「神田祭」の写真と一緒に見ていただければと思うのですが、神田祭は昭和 17 年以降中断されていました。戦争が終わって、みんなの気分を上げていきたいということもあったのか、復興祭というものが計画されました。アメリカからの食料支援に感謝して、いろいろな山車が出てきたということですが、左側には支援物資が入っていた缶の上にだるまが載っているものですか、少し見にくいのですが後ろのほうには食パンを模した山車も見えます。33 番目が昭和 27 年に復活した神田祭の写真です。

31 番の写真で「皇居の濠で魚つりをする人びと」の写真です。カラーの写真で、今では考えられないですが、お堀で魚つりをしている人たちです。昭和 22 年に国民公園として一般開放されたためにこうした情景が見られたようです。ただ昭和 24 年 5 月に魚つりを禁じられた「国民公園管理規則」が制定されて、それ以降、現在もそうですが、捕獲は禁止されています。

この写真は、ディミトリー・ボリアという GHQ の専属のカメラマンだった方が撮影したもので、その方が滞在していた期間を撮影期間とし、かなり長い期間にしておりましたけれども、今回写真展で紹介するに当たって少し調査を進めまして、昭和 23 から 24 年ということで撮影期間を少し絞り込むことができました。

34 番「遺児参拝の記念写真」になります。こちらにも熊本県の遺児たちが靖国神社を訪れたときの写真です。戦時中も遺児たちが靖国神社に集まってきたことがありましたが、戦後もそういった活動はあったようです。これは遺族の方から寄贈を受けた写真で、御本人が写っています。

続いて 37 番から 39 番までが昭和 39 年に撮影された写真で、オリンピックに向けて少し復興していく様子やインフラが整備されていく様子が見える写真です。

40 番「千鳥ヶ淵の桜」が最後の写真になるのですが、昭和 44 年に撮影されたものです。御覧になって感じる方もいらっしゃると思うのですが、今も同じような景色が広がっております。ここまで様変わりしていく九段下界隈を御紹介してきたのですが、最後の写真では、昔も今も変わらない風景や、こういうご時世ですので、この写真からちょっとした安らぎみたいなものを感じていただけたらということで、こちらの写真は大型のパネルにして紹介します。写真展の説明は以上になります。

○波多野座長 資料 7 はよろしいでしょうか。

○井上総務部長 資料 7 は後ほど。

○波多野座長 それでは前年度の事業について御説明をいただきましたけれども、何か御質問とか御意見とかありましたらお願いします。

○増田委員 1 点感想、1 点質問とは言えないかもしれない素朴な疑問と言いましょか。まず最後のところで林学芸課長と坂尻図書情報部長、お二人の新しい企画と言いますか、今展示中のことに関する感想なのですが、特に資料 5 のほうでしたか、極めて私事で恐縮ではありますが、正に小松崎さんは子供心に心を驚掴みにするという、正にその通り



であって、私は模型作りなんかには熱中した1人で、特に航空母艦の大鳳を作った記憶は鮮明に覚えていて、プラモデルが出る前でしたね、木を削って作ったり、そのときの半分は小松崎さんの絵に惹かれて購入ということだったと思うのです。ですから恐らく私の世代の人たち、私もまた是非見たいと思っていますけれども、本当にそういう企画には感心しているのです。

またこの周辺の九段下界限の写真展をやるという、これまた非常に企画力があると言いましょうか。素朴な疑問なのですけれども、昭和館ではこういう新しい企画を打ち出す際の中の、固い表現をすれば決定過程というのか、デシジョン・メイキングというのか、それはどういう形でなさっておられるのか、是非その辺は今私が関わっている平和祈念展示資料館も参考にさせていただきたいと思って、どのような形でこういうふうに新しい、非常に想像力ある企画展を決めておられるのかということなのです。

○林学芸課長 林のほうから先に回答いたします。それこそ増田委員が一番パシっとくる年代のものでもあり、やはりこの大鳳の絵、私は実は今回の展示した作品で一番この絵が気に入っているのですけれども、すごく横長でプラモデルの箱のサイズそのままの原画になっているのです。この企画展は実は2年前に中止になった、コロナで開けられなかったというものなのですが、この企画展を企画するときにはどちらかと言うとテーマを上司から与えられて、私は企画展を2年前に作りました。

その際、当時の上司からは少年文化というテーマ、そして小松崎茂というキーワード。これで展示ができませんかということを言われました。ただ小松崎茂さんに関する資料が昭和館には所蔵されていないという状況でした。調査を進めると、小松崎茂さんの原画資料の保存状況、資料分布が正直言いまして劣悪な状態にあることが分かりました。今回出版社からお借りしていた資料は非常にまとまっていたのですが、大半は結構お弟子さんたちが個人的に持っていらっしゃるという状況で、非常に資料のまとまりというのが悪かったので小松崎さんを調べていくと同時に、私が非常に好きな挿絵画家というのが実は梶島勝一さんだったので、それでこの2人を軸にしようということで、企画内容を考えました。

ですから最初上司からのミッションとして与えられたテーマは少年文化ということで、まさか私がこのテーマから美術展を作り上げるとは、という空気になったのですけれども、昭和館ではほぼ美術展をやった経験がないので、チャレンジをしました。さらに今回はその企画展をリメイクしたという、この展示に関してはそういう企画経緯でした。

今、我々学芸部の職員は次の企画展、その次の企画展というのもテーマが決まっていますが、基本的にプレゼンテーションを4月にいつもやります。4月に全員、企画を春と夏、これを1本ずつ企画案を作るというミッションを4月に出して、プレゼンテーションをして投票します。それで企画展案を決めているという状況になります。これは私が学芸課長になってからになりますので、ここ1、2年ぐらいのやり方になります。

企画展テーマを採用された職員が主担当になるのですが、それは常勤1種、常勤2種と学芸員の職員の立場が違うのですけれども、平等にそのミッションを背負ってやるという

ことで、頑張るって作るということ、そういった企画のすり合わせをしています。

昔はどちらかというところ、こういった資料が寄贈で来たからとか、収蔵資料の性格ありきで企画展テーマを決めるとが多かったのですけれども、今はプレゼンテーションによる企画競争を学芸部でやっています。どうしても平和祈念展示資料館に比べますと、昭和館はテーマ性が非常に良くも悪くも輪郭がはっきりせず広いので、とはいえ収蔵資料の傾向が昭和館は偏っているところがありますので、企画展を契機にして収蔵資料のいろいろな展示レパートリーも増やしていきたいと考えています。

あと平和祈念展示資料館は抑留絵画の美術展示というのに非常に長けている施設になりますので、私自身そういったところの刺激を受けて、やはり美術品を扱えるということは学芸員としてのスキルが非常に上がりますので、そういったことも踏まえて今回の企画展を通じて、うちの学芸員も手伝うことでスキルアップにつなげました。学芸部からは以上です。

○波多野座長 ありがとうございます。今の話に関連しますけれども。まだありますか。では簡単に、時間がないので。

○坂尻図書館情報部長 写真展の説明を手短かにいたします。写真展は、所蔵写真を紹介するというのが基本の方針とありますので、所蔵写真の中から何ができるかという形で考えています。ですから、はじめからこういうテーマで何かできないかというよりは、係の中で所蔵写真の中から、興味を持ってもらえるテーマはどういうものかを探りながら、部内で企画を募って相談しながら決めていきます。以上です。

○羽毛田館長 一言、館としての姿勢という意味で、雑駁なことを一言付け加えさせていただきますと、いずれにも共通するところで申し上げれば、まずはこの館の使命・役割に適うようなテーマが何かということと、もう1つはやはり多くの人の興味を惹きそうかどうかという、この2つをまず頭に置いて、ここを申し上げたいことなのですけれども、できるだけ若い職員を含めて多くの職員が、ブレインストーミング的な過程を経てみんな侃々諤々やるなかで出てくるテーマを、「これは面白そうだ。」「これはうちの館からいって、こういうことを訴えることはいいことだ。」というようなことを、最終の会議で決める。そのような余り型にはまって製造するのではなくて、できるだけ手作り感のあるような展示ができたということ、いつも心掛けながらやっています。

○波多野座長 ありがとうございます。関連してこれまで企画を公募するとか、あるいはそこから持ち込まれるとか、そういうことはあったのでしょうか。

○林学芸課長 企画案を外部からお声掛けをいただくことはあったのですけれども、基本的にはそういうことに応じてという企画展を実施した経歴はありません。今まではどちらかと言うと学芸部も所蔵資料、代用品とか紙芝居とか、そういった非常に収集としては力を入れてきたものをテーマにした企画展、資料の性格ありきでやっていたのですけれども、先ほど羽毛田館長がおっしゃいましたとおり、人に関心を持ってもらうきっかけ、何かアイキャッチ的なものにもう少し企画力を注ぎたいという気持ちもありまして、今では職員

の企画競争をここ2年くらいはやっています。

○羽毛田館長 今申し上げたとおりなのですが、私自身のことを申し上げれば、アンケートを取っていますが、その中にときにこんなものを見てみたいというのをアンケートで出されることはありますので、それは大事にしたいなといつも頭において、ですから全体の会議のときにメモをしていまして、こんなことを言っていたのでできるかということ投げ掛けるといったことはやっています。

○波多野座長 よろしいでしょうか。昭和館のお考えはよく分かりました。それではまた全体が終わってから戻っていただいても結構ですので、次年度の事業計画についてお願いをいたします。

○井上総務部長 時間の都合もありますので、要点を絞って御説明します。まず資料2と資料7を御覧いただきたいと思います。資料2では、令和4年度の昭和館運営事業計画について記述しております。令和4年度の昭和館運営事業予算については、1ページに記載のとおりです。歳出関係の金額は現時点の見込額で記載しておりますが、最終の金額については、厚生労働省との委託契約によって決定をする予定です。なお、欄外ですが、上記に加えてデジタルアーカイブの構築等の経費を、令和3年度補正予算に3,600万円強の予算措置をしていただいております。この事業については令和4年度に繰り越して実施予定ということで、特に厚生労働省より配慮を頂いております。

続いて、2ページを御覧いただきたいと思います。2、3ページでは広報活動計画、来館促進対策、展示事業について記載しておりますが、記載のとおりです。

続いて、資料の4ページでは、令和4年7月の特別企画展を記載しております。「昭和の子どもたちとお菓子」(仮称)と「九段会館がみた昭和」(仮称)というこの2本立てで、現在案を検討しているところです。

それから資料の5ページの巡回特別展については、令和4年度は神奈川県と沖縄県で開催を予定しています。

続いて、資料の6ページをお開きいただきたいと思います。資料の6、7ページは、資料収集等について記載しております。6の戦中・戦後の労苦を伝える語り部活動事業については、育成事業を終了しましたので、引き続き語り部の活動事業に本腰を入れて実施する予定です。

資料7ページの(4)デジタルアーカイブの構築についてですが、これは先ほど御説明したように、令和3年度の補正予算で予算を獲得していただきましたので、写真、映像、実物資料等をインターネット上で外部公開するためのアーカイブを構築すべく、具体化を図っていきたいと思っております。当委員会等でも、デジタルアーカイブの重要性等については御意見等を頂いておりますので、それらを踏まえて対応したいと考えているところです。

続いて、資料の8ページを御覧いただきたいと思います。資料の8ページには関係施設との連携、運営委員会の開催ということで記載しております。併せて横長の別紙7では、

「令和4年度の昭和館運営事業計画表」ということで、それぞれの事業を個々具体的に記載しております。特に申し上げたいのが総務部部門のホームページの関係です。特にコロナ禍ということで、ホームページやSNS等々の重要性は指摘を頂いておりますので、厚生労働省のほうで御配慮いただき、ホームページのリニューアル予算を付けていただきました。それを令和4年度で具体化すべく、検討したいと思っております。具体的には総務部のみならず学芸部、図書情報部もいろいろ意見を出し合い、現在のホームページをより新たな形でリニューアルしたいと考えているところです。簡単ではありますが、資料の説明は以上です。

○波多野座長 ありがとうございます。それでは今年度の事業と併せて、次年度の事業計画について、何か御意見がありましたらお願いをいたします。

○神津委員 神津です。いろいろ説明していただいてありがとうございます。今日説明していただいたことを聞いていて思ったのですが、やはり企画展というのは企画をしたものによって、そこに集まる年齢層も違うし、出自と言いますか、興味を持っている分野も異なるのでかなり集まり方に違いが出ます。例えばポスターとか、椛島さんや小松崎さんの原画展や写真展というのと、ちょっと層が違うような気がするのです、そこを逆手に取って20代の人を集めたいとか、30代を集めたいという切り口を持つのが1つかなというように感じました。羽毛田館長もおっしゃっていたアンケートの結果を見て、こういうものを見たいというものを拾い上げていくというお話もありましたけれども、そういう視点も必要かと思えます。

反対に、常設展や巡回展のようなものは、来れば絶対に理解が深まっていきますし、展示内容についても非常に深く考えます。このアンケートを見ていていつも思うのは、ただ良かったというだけではなく、このアンケート結果というのは、その後、自分のことに転換していくのです。実は、これはすごく珍しいことです。それを見てただ良かったとか感動したというだけではなく、それを自分の中に取り込んでいくことができる展示方法を取っていらっしゃると思うので、非常に大切なポイントだと思っております。ですから企画展の視点の中には、こういう人を集めたいという視点をどこかに入れてほしいということです。また、常設展や巡回展などは、来れば必ずつかみ取れるので、来客者を集める、来ていただくことに関して、何か欲しいなという気を持っております。

○波多野座長 ありがとうございます。よく分かりました。私からも少しだけ申し上げます。この次年度予算の中に、デジタルアーカイブの構築のための費用が3,000万円ちょっと計上されているようですけれども、やや少ない感じがいたします。今、神津さんがおっしゃったように、何か企画展をやって、今までの考え方は来館者をひたすら待つという感じですね。小学校の修学旅行などもそうかもしれません。ただ、ほかの例えば大和ミュージアムのような所を見ていると、これからはやはり企画展のようなもので、特定の小中学生が関心のあるようなテーマでデジタルアーカイブを作ってデジタル化を推進し、デジタル展示のようなものを対外的に積極的に発信していくことが必要だと思うのです。

今回、多少なりともその費用が付いているようですが、多いか少ないかと言うよりも、そちらの方向に向いて発信していただきたいと思うわけです。以上です。

○井上総務部長 先ほどの説明を補足させていただきます。今、波多野座長からデジタルアーカイブ構築の予算が少ないのではないかという御指摘を頂きました。これについて更に申し上げますと、この中の要素としてデジタルアーカイブの構築経費、ホームページのリニューアル経費、展示ケースの設置経費等々が含まれており、必ずしも全額がデジタルアーカイブの金額ではありません。制約がある中で、特にデジタルアーカイブの国全体としての取上げの中での御配慮と伺っております。特に個々の金額は、一般競争入札の情報になりますので、ここでは申し上げられないのですけれども、私どもは予算の範囲でより効率的に効果が上がるような事業を実施したいと考えております。以上です。

○波多野座長 分かりました。それでは事業案について、具体的に修正すべき点はありませんか。

○増田委員 1点だけよろしいですか。こちらにないことという意味で、1つの御提案です。実は私ども平和祈念展示資料館の新年度の柱として、10ぐらい新しい企画を打ち出そうとしています。それらが全部、うまく成就するとは思っておりませんが、そのうちの半分でもできたらと思っています。

そのうちの1つですが、要するに、今の日本に私どものような資料館と言いましょうか、あるいは博物館と言いましょうか、相当な数があると思います。もちろん国をバックにしたもの、全く私的にやっているもの、また、分野も非常に幅広いかと思いますが、少なくとも終戦前後の歴史的な問題を扱う資料館です。実はかつて平和祈念事業の基金というものがありまして、その時期に私どもがキーステーションの役割をやらせていただいて、13館で年に1回、幅広く東北から九州に至る資料館のスタッフの方にお集まりいただき、いろいろ議論する機会があったのです。ところが、今はそれがもう完全に中断しております。やはりこれを復活させるべきではないか、復活させようということ今提案をして、それを具体化していこうということです。

なぜなくなったのか理由を調べてみますと、1つにはお金の問題がありました。つまり、当時は基金が少し潤沢だったものですから、東京にお越しいただく旅費や宿泊費まで出していたようです。ところが今はもう資金的にそんなに余裕がない。しかし今はオンラインという文明の力があります。これを使うことで東京までお越しいただくなくても、そういう会議ができるのではないかと。

特に昭和館さんも私どももそうですけれども、コロナ禍において閉館という、かつてない逆風を受けたわけです。同じ資料館・博物館はこういう問題に対し、それを克服するためにいろいろなスタッフの方が努力をされていると思うのです。シンポジウムと言うと大げさかもしれませんが、その克服策や人集めをどうやったのかというようなテーマで意見交換ができるのではないだろうか。そして人的コネクションができれば、私どもでは地方展というのをやっておりますが、当然そこから、「では、うちに来てください。」

ということにつながる可能性も出てきますから、そのような企画を実現すべく、今、水面下でいろいろ検討しています。翻って昭和館さんとは、3館連携という形で5年ほどやらせていただいておりますが、もっと広く、日本中にある同類の資料館のネットワークと一緒に作っていきませんかという辺りが、今日の御報告の中には見当たらなかったもので、あえてそういう方法もこれありではないかという、単なる御提案をさせていただいたということでした。

○波多野座長 ありがとうございます。今のようなほかの館との連携というのは、全体計画の中では、まだ位置付けるまでにはいってないという感じでしょうかね。

○羽毛田館長 御案内のとおり目下、実現して実際にやっているのは3館連携で、あとは非公式にいろいろな資料のやり取りだったり、展示をするに当たって、それぞれの所と御連絡を取ったり、資料の貸し借りをしたりという形での連絡、あるいは個人的なつながりによる連携はいろいろやっておりますけれども、組織的に今おっしゃったようなところまでは至っていないというのが正直なところですね。しかし非常に大事なことだという御指摘がありましたので、それこそ3館連携の中でのテーマとしてすぐに始められるかは、それぞれの御事情もあるでしょうし、もちろんお金の問題もありますから、条件が整わないとなかなか難しいかと思っておりますけれども、方向としては非常に大事なことだと思っております。私どものほうも、これは一生懸命検討したいと思っております。また、3館の中でそういうことを深める努力を、これからしていければいいのではないかならうかと思っております。以上、お願いします。

○波多野座長 ほかにいかがでしょうか。

○上安平委員 これは何も今年とか来年に限ったことではないのですけれども、昭和館の展示を見ると、いつも収蔵品がとてもきれいに展示されていて感心します。企画展も非常にタイムリーなものを取り上げて、それにも敬服しています。それを前提として申し上げたいのですが、これから先、昭和というのはどんどん古くなりますよね。もうだんだん歴史の波の中に飲み込まれていくような気がしています。その中でどのような存在感を示すかというのが、これから大きく関わってくるのではないかなと思うのです。

そのためには日常の運営活動、企画活動にも力を入れていくと同時に、収蔵品や証言や記録というものをたくさん貯め込む、収蔵品を充実させるということが、とても大事になってくると思うのです。地味な作業かもしれませんが、昭和館の持ち物はいい、ここに行けば何でもある、何でも見られるというようになるまで、一生懸命集めて頑張っていて、昭和館が異彩を放つぐらいの歴史資料館になっていただけたらいいのではないかなと思っております。エールを込めて申し上げます。

もう1ついいですか。その際に是非、グローバル化のほうもお進めになってください。今や日本の中だけで話を考えていく時代は過ぎていると思うのです。これから先、外国の方もたくさん訪れるようになるでしょうし、外国からの引合いみたいなものも、質問や疑問も寄せられるようになると思っておりますので、そういうときに世界に向けて発信なさること

もお考えになったらいいのではないかと思います。以上です。

○波多野座長 やはりグローバル化も大事だと思います。そのためにはデジタルデータとかデジタル展示、日本に来られなくても海外でも見られるようなものが、非常に効果的だろうと思うのです。館の内外において見られるようなものです。今のところデジタル展示、デジタルによる企画展示が非常に有効な手段だろうというのは、どの館も感じているようです。

それから、上安平委員がおっしゃったように、確かに昭和は非常に遠くなったという感じがあります。平成そして令和と続いてきたわけですので、それを長く記憶にとどめる、記録にとどめると言いますか。例えば、昭和館で出している年報や雑誌があるのでしょうかけれども、やはり将来に昭和という時代を記録し、それを様々な方法で記憶化していくということに今後、もう少し留意すると言いますか、必要なときにきているという感じがいたします。

ただ収蔵品を集めればいいのかというと、スペースの問題などもあるでしょうから、必ずしもそういうことはできないでしょう。何らかの方法で昭和のものを、記憶を紡いでいくという感じですね。デジタル化のことばかり言うようですけども、そういう点でもデジタル化が1つの有力な手段です。記憶あるいは記録を後世に伝えるという意味でも、そういう感じがしました。もう少し時間がありますので、ほかにいかがでしょうか。

○増田委員 私は、また昭和館の企画を褒めたいのです。『この世界の片隅に』という漫画から始まった、あれは戦争というものの捉え方を本当に根本から変えたのではないかと思いますのです。ついつい我々は戦争と言うと、今正にウクライナで展開されているような残酷非道で、女性や子供や老人といった非戦闘員が被害に巻き込まれるというリアルな問題を取り上げるのが当然であると思っていたところ、あの漫画家は、もっと日常生活での戦時風景というものを描きました。これはおそらく昭和館さんは大きな役割を果たされたなと敬意を表しているのですが、これをもっと広く考えれば、同じ戦争や戦後問題を考える私どもとしても、そういう切り口があるのかと。あそこから我々はいろいろ引き出すテーマがあるように思い、第2の『この世界の片隅に』を目指して、新しい切り口を模索する努力が必要ではないかということを感じ、ついでながら言わせていただきました。

○羽毛田館長 それでは一言、お礼を兼ねて申し上げたいと存じます。様々な御指摘をいただき、私どもの今後にとりましても、どれも大変大事な御意見だと思いますので、よくよく咀嚼をしながら、今後の運営に生かしていきたいと思っております。

ちょっと感想めいたことを申し上げますと、実は「昭和館」という名前を付けているがゆえのある種のインパクトと同時に、実は概念を曖昧にしているところがあります。何か昭和という時代を後に継ぐ館ではないかという、曖昧な格好になってくるのも昭和館の存在感としてはよろしくない。今、増田委員もおっしゃったように、正に昭和あるいは戦中・戦後というものを庶民という切り口で見た、そういう歴史をきちんと伝えていく。そのときの国民の戦争による苦しみや悲しみ、あるいは戦争にいかにも庶民自体が狂奔してしま

ったかという歴史をも含めて伝えていくのが、本来のところだろうと思います。

したがって座長がおっしゃったように、デジタル化を進めることによって、そういうものをいかに伝えていくかという方法論の意味においても大事だと思います。また、時代ということで申し上げれば、あの時代に生きた直接の人の記録・記憶を残しておくというのは、時の制約がありますから、もう間もなくできなくなります。したがって、そういう今だからこそできることを、きちんとやっていくことも大事だと思いますので、そういった事業にもこれから力を入れてやっていければと思います。いずれにしても先生方皆さんのおっしゃったことは、私どもとしても大変貴重な御意見だったと思いますので、心してやっていきたいと思っています。

それともう1つ。先ほど神津委員がおっしゃった、展示をいわば自分の身に引き付けて見てくださっているというのは、非常に大事だと思います。展示がそういうように訴えて、それを見ることによって自らのこととして理解をしていただけるようなもの、時代は平和ですから、どうしても絵空事になってしまいがちですので、そこをいかに生き生きと伝えられるかということも、大変難しいことだとは思いますが、心懸けていかなければならないと思っております。

○波多野座長 そろそろ時間です。ほかに特にありますか。事務局のほうから何かありますか。

○櫻井補佐 御意見等、ありがとうございます。事務局からは特にありません。

○波多野座長 今、館長からもお話がありましたように、ここで様々な御意見を頂きました。事業計画を変更するというわけではないのですけれども、それらを踏まえながら推進していただければと思います。よろしく願いいたします。

それでは、全体の事業計画案については異議なしということで御了承いただきますが、よろしいでしょうか。

(異議なし)

それでは、これで審議を終了いたします。皆様にはいつものことですが、貴重な御意見をありがとうございます。

最後に、次の開催予定は次年度の今頃の時期になります。来年の3月を予定していることです。各委員の方々には、また改めて事務局から御連絡を差し上げます。よろしく願いいたします。本日はちょうど2時間ぐらいになります。いつものように貴重な御意見をいただきまして、ありがとうございます。これを持ちまして、第22回昭和館運営有識者会議を終了いたします。ありがとうございます。